

## 国際関係学科の猪狩春樹さんが ベラルーシ共和国のロシア語オリンピックで優勝！

本学の外国語学部国際関係学科4年生の猪狩春樹さんは、2015年9月から2016年5月末までベラルーシ共和国の首都ミンスクにあるベラルーシ国立大学国際関係学部に留学していましたが、帰国直前に行われた同国教育省主催の外国人留学生向け祭典「第四回ロシア語とベラルーシ文化の日」関連行事の「ロシア語オリンピック」(5月18日～21日)に参加し、第五部(学習歴3～5年の人文専攻でない学生・院生)で見事優勝しました。

猪狩さんは、2013年9月から一年間、本学の協定大学のシベリア連邦大学(ロシア・クラスノヤルスク市)でロシア語を勉強していますが、さらなる研鑽の地にベラルーシを選んだのには、いくつかの理由があります。

まず、ベラルーシの言語事情です。ベラルーシは人口一千万人ほど。東ヨーロッパ平原の西端にあり、ロシアとポーランドに挟まれ、ウクライナを南隣とする国です。主要民族はベラルーシ人ですが、ほとんどがベラルーシ語とロシア語のバイリンガルで、むしろロシア語を主言語としたり、ロシア語しか話せない人の方が多く、首都ミンスクはロシア本国と遜色のないロシア語環境なのです。

また本人がベラルーシの新聞記者にインタビューで語っていることですが、「ベラルーシは物価が安い」ことも選択にあたって魅力的だったようです(「寮費は日本の数十分の一」だそうです)。生活は快適とは言えないものの、人々は親切で、いつでも手助けしてくれる。「いつか機会があれば、ベラルーシに戻ってきて働きたい。帰国したくないんです。こんなふう思うなんて、来る前は考えられませんでした」と楽しかった留学生生活をロシア語で語っています。

\* 記事はこちら

[http://naviny.by/rubrics/society/2016/05/18/ic\\_articles\\_116\\_191692/](http://naviny.by/rubrics/society/2016/05/18/ic_articles_116_191692/)

その猪狩さんにとって、留学中の最大のイベントがロシア語オリンピックでした。

一次予選は筆記で、作文(「ロシア語の精神性と偉大さ」という課題がその場で言い渡され、二時間で書き上げる)と語彙・文法の試験(二時間)。一日おいた二次予選(口頭発表)も同じく課題が二つあり、準備した原稿を見ながらしゃべる五分間は「日本人について」と題して日本人の集団主義文化とかベラルーシ人の日本人イメージについて語り、続いて「インターネットのプラス面とマイナス面」について即興で話をしたそうです。

隔年開催で今年が四回目となる「ロシア語とベラルーシ文化の日」は、ロシア語を学ぶ留学生をベラルーシに呼び込むために政府が力を入れている祭典で、今回も国内 30 大学から約 600 人が参加しています。祭典中の数ある行事でも、このロシア語オリンピックは、留学の成果を披露する場として重視されており、猪狩さんもロシア語の先生の下でかなりの特訓を受けて本番に臨んだそうです。

その努力が実っての優勝であり、猪狩さんも「非常に達成感のある留学だった」と語っています。

ロシア語は、本学では第二外国語にすぎず、外国語学部の専攻言語のような手厚い授業が用意されているわけではありません。ですが本人のやる気と努力があれば、ここまで語学力が伸びるのだという実例として広く紹介したいと思います。



猪狩さんがもらった表彰状

文責：半谷史郎（国際関係学科、ロシア語担当）